

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 コトキケイ

挿絵 しなのゆら

第一章 魔法少女なんて大っキライ！

第二章 ネコミミ魔法少女モード

第三章 魔法少女リダイナマイト

第四章 肉ドレイ委員長VS眼鏡魔法少女

第五章 魔法少女の心

エピソード

006

054

102

164

208

249

登場人物紹介

Characters



みなみの ころ

南野 心

男の中の男を目指す美少年。しかし、母親の手で性転換させられ魔法少女の道を歩むことに……。



みなみの

南野 はるか

心の母親。三十路前だが現役の魔法少女をやっている。

ほくと

北斗 カナ

心の幼馴染み。何事にも動じないクールビューティー。

とうかいりん なおき

東海林 直樹

心の幼なじみ兼ケンカ友達。金持ちの息子。

「あはー、心のおちんちんいっぱい硬くなってきた。身体中の男のコの成分をここに集中させなさい。不要な雄分は全部あたしが出させてあげ・る。そうすれば——」

「ちよっ、調子乗るなよ、バカはる……んくう……っつ!」

魔法少女衣装に身を包んだ母親の背から、うねうねと触手が何本も鎌首をもたげ、心の手足に絡みついてくる。中には先端に大きなギョロ目を持った一本があり、心を上から覗き込んでいた。はるかかの身体に融合している触手妖精ウエストの本体だ。絡みついた触手が心の両手を万歳の格好にさせ、ジャージの上着をいそいそと脱がしていった。

「このっ……アホ触手! 後でひっこぬいて、やる、からっつ!」

心とウエストの付き合いは長い。心が物心つく前からはるかど共生し、普段は玩具の尻尾みたいにお尻でぶらぶらと揺れていたのだ。幼かった頃は子猫みたいにその尻尾にじゃれつき、遊んでいた記憶もある。だから心は爬虫類のように見えるウエストのギョロ目の些細な動きから、この触手妖精が何を言いたいのか大概理解できた。曰く、

『マジ、ゴメンな。まあ、しゃーないやん、観念しいや、坊ちゃん』

主人であるはるかには犬のように従順なウエストに是非はないようだった。

「ち、ちくしよ、お、おまえら絶対に許さねえ……うわあああ!!」

「はーい、下も脱ぎ脱ぎしましょうう。きゃあつ、おちんちんが丸出しいい」

満面に笑みを浮かべたはるかがウエストと絶妙なコンビネーションで心のズボンをプリーツごとずると、一気に引き下ろした。燃え立つような身体の熱に促され、急角度で屹

立した小さなペニスが肌着から解き放たれる。

臍まで反り返り、ぺちりと可愛らしい音を立てて下腹に当たった。心はかーっと顔を真っ赤にする。包皮を被ったままの未熟な勃起は、これまでにないくらい硬く尖り、先端の包皮の隙間から僅かに顔を出す。ピンク色の亀頭部まで痛いくらいに充血させていた。

手足を触手に絡まれたまま、心は生まれたての姿に剥かれてしまう。股間に屹立している幼い突起がなければ、胸が発育不良の少女で通用する愛らしい裸身である。

新雪のように白い肌の色。両手を頭上で磔はりつけにされてさらけ出される脇の下の窪みすら愛らしい。うっすらと浮かぶ滑らかな肋骨の凹凸も、薄い桜色で描かれた小さな乳輪と乳首のぼっちも、ビードロのようにつるりとした下腹も、薄く割れた腹筋の直中に弱点みたいうがに穿たれた形よい臍も、全てが芸術品の領域にある造形だった。

赤い産毛が薄く茂る股間の小生意気な隆起すら、エッジをきつくしながらも生々しさを発するには程遠い。全体的に白さを残したペニスは絵画に描かれる天使の物のような気品を発していた。心の裸身をうっつりと検分しながら、はるかが言った。

「えーと、やっぱキミは女の子になった方がいいと思ふ」

「てえ、てめえええが、男に産んだんだ、ろ……がっ」

心は顔を限界まで真っ赤にした。

情けなさでまなじり涙の粒が盛り上がる。

「だから間違いを是正するの。さあ、解放しなさい、心。本当の自分の心を……」

はるか指先が心の造形を確かめるように頬を伝い、首筋を下り、薄い胸板の表層を擦った。少年らしい瑞々しきで引き締まった筋肉は未だ成長期の途上にあり、日々変化していくガラス細工のような脆さも同時に内包している。

はるか心は裸身の上に四つん這いになり、女豹の仕草で色香を匂い立たせた。

指先でなぞった後をちゅっちゅつとキスで辿り、たっぷりと唾液を含ました舌でてらてらと艶光らせる。首筋から胸にまで丹念に愛撫が与えられる。寝間着がなくなっても熱気は失せない。汗が滝のように噴き出し、ソファベッドを濡らした。得体の知れぬうねりが内部で渦巻き、今にも毛穴から噴き出してきそうな錯覚に囚われる。

愛撫と一緒に頭の中が煮立って融解を――。

「ふうあつ！ んんんんんうーっ」

はるか冷たい唇が右の乳首に吸いつき、濁音を奏でた。今まで経験したことのない刺激で胸が吸引される。それから乳輪の淡い桜色の円形をなぞるようにして、舌先が乳首の周囲をくりくりと愛で回った。胸のぼつちの先から粘ついた唾液がねとりと糸を引く。気持ちがいい。乳首の感度を高められてしまう。心は必死になって叫んだ。

「だ、だから、やめ……ろってばああああ。こんなの、と、父さんだつて悲しむぞっ」
はるかの動きがピタッと止まった。

らしくなさすぎて日頃から忘れがちだが、はるかは母親なのである。つまり常識外れの彼女にも夫はいる。今はどこにいるのかわからない。彼女にその辺のことを聞いても珍し

く唇を尖らせ言葉を濁す。カナの母親に尋ねても苦笑されるだけだった。心も父親の記憶がほとんどない。繊細な人だったように思う。だから多分逃げられてしまったのだろう。今の危機を脱するにはそんな記憶も臍げな父親に頼るしかなかった。

「は、はるか……?」

動きを止めた母親は暫く俯いていたが、やがてゆっくりと顔を上げた。息が荒い。頬がさつきより赤く染まっている。その両眼は――はつきりとした情欲に濁っていた。それは知るべきではない、知りたくない母親の「女」としての切なげな表情である。

「なっ、なんでーっ!」

「あ……こ、こころ、ずるいよ、今あの人のこと思い出させるなんて……。最近ずっとセックスしてないのにあの人のこと思い出したら……んん、あそこ、疼いちやう……」

はるかが勢いを増して心に襲いかかる。藪蛇だった。熟れた女体がのしかかる。

先ほどまでの脳天気な雰囲気は失せ、じつとりと雄を狙う雌の眼差しをしていた。

「やめっ、やめろっつては、はる……あくう!」

執拗な愛撫だった。薄い胸板全体が舐め回され、はるかが唇と舌と指先で心の両方の乳首を刺激してくる。手足に絡まる触手に押さえつけられた身体がその度に筋繊維をびくつかせて、小さく跳ねる。むず痒さが明確な快感の圧力となって発露していく。衝撃的な乳首の痺れが電撃のようにジグザグに走り、下腹の海綿体を直撃する。

(あうう、む、胸で、こんな、感じて……っ)

懸命に勃起するペニスが打ち上げられた稚魚のようにびくんびくんと下腹の上で踊り回る。濃いピンク色に充血する亀頭の鈴口から、とろり。透明な雄液を漏らし始めた。

「んう……ほら、心、おちんちんがこんなにたくさん蜜を出してる」

臍すねに絡みついた触手がぐいっと心の両足を開かせた。情けないM字開脚にされ、無防備に股間がさらけ出される。もう泣きたくなかった。母親を前に今さらおむつを換えられるような格好にされる。しかも股間はギンギンに勃起したままなのに。

「はるかあの執拗な責めが下方に流れ、あそこで弾ける。心はぎゅつと唇を噛みしめる。

「つつ……ふうつ、ぐううううううう——っ！」

ぶちやり、べちやべちやべちや、ずちゅ、じゅるうううう。

てらてらと食虫花のように艶を増したはるかの口唇がささやかな肉の尖りに触れる。その合間から覗いた舌先が無防備な裏の腹を晒すペニスを根本から舐め上げた。最初は壊れ物の強度を確かめるように、それから空腹の動物が獲物を喰い荒らすように大胆に。

「……はあああ、すごい、青臭い少年の味……ん」

はるかの両腕がM字に開いた太腿を下側からがっちり抱え込む。赤毛の頭を股間に深く深く潜り込ませる。口淫の爆撃が心の肉槍を中心に太腿の内側まで舐め回した。神経を焼き尽くす野火で下半身を蹂躪していく。れろり、れろれろれろれろり。

我慢があっけなく霧散し、心は情けない声音で嘆願する。

「あんう！ やあ、やめ、もおおおうううううっ！」

自分の手で触れるのとはまったく違う愛撫に心は錯乱した。

はるかにはうっとり嬉しそうな表情で陰囊まで口に含む。心の玉を口の中でおいしそうに転がし、ぎゅっと片手に掴んだペニスを荒々しくしごいてきた。それは大人の女の熟練した手業である。ラバー地のような柔らかさで吸いつく赤いロンググロープの感触に包まれ、一物から包皮が剥がされていく。

べり、べりり……。僅かな痛みと共に柔らかな剥離音が脳裏に反響し、亀頭に密着している保護膜が捲かれてしまう。初々しいピンク色の穂先が半分まで剥き出しになった。

「くうっ!? だっ、だめ……それ……っひゃああああ——っっ！」

心の反駁を無視して、はるかは顔を出した亀頭に陶然と口づけする。むちゆり。窄められた紅唇がそのまま広がり、亀頭をおいしそうに呑み込んでいった。溢れる唾液が剥かれた包皮と肉棒の合間に流れ込み、剥離を早める。

じちゆ、じちゆる、じゆちゆるるるうう。

はるかのかのぷっくりとした唇が指と連動して包皮の残りを裏返す。

完全に剥き出しになった穂先に許容を超えた極彩色の快楽が弾けた。

(む、むかれてるうう、はるかなんかに、全部、むかれたあああ)

剥き出しの亀頭は直接触るのが憚られる初々しい感度を持っていた。心は自慰をする時だつて包皮の上から軽くしごくだけだ。

それなのにはるかの唇の輪が未熟なカリの部分を強く締めつける。口腔で激しい舌使い

が初めて剥き出しになった雄肉のフォルムの表層をこそぐ。生まれたての子猫の毛繕いをするみたいに。本体の中程から根本までは指先で緩いマッサージを加えながら、敏感すぎる肉棒の先端を手慣れた口淫で吸い上げ、舐め尽くす。

屈辱的でありながら、頭を浮かせる未体験の衝撃だった。過敏すぎる肉棒には耐えきれない口淫である。気持ちよさと辛さが一緒くたになり、腰がびくびく痙攣した。

はるか鮮やかな赤毛の頭を緩く前後させながら深度を徐々に下げ、ペニスを産毛の茂る根本まで口でしごき、呑み込んでいった。

白さの目立つペニスはたちまち母親のまぶす淫液に恥毛まで濡れそぼる。心は淡い赤毛を震わせ、仰け反った形のよい顎先を情けなく震えさせた。

たつぷりと糸を引く粘液が溢れ、心の股座を伝って愛らしい尻孔のつぼみまで零れる。肌色のままの色素を残した排泄器は甘菓子みたいな繊細な造りを披露している。不浄をひり出すとは思えない清潔な菊皺の締まりを、赤い指先が容赦なく貫いた。

「つつ!? つんうああああああああああつつ——つつ！」

嗜虐的な輝きを猫の目のような瞳に宿らせながら、はるかがぐりぐりと手首を捻る。

「かわいい、心。お母さんの指がそんなに気持ちいい? ほら、もっと奥まで……」

「あっ! ああんううつ。まっ、まっ、おねがいい……だからあ、ふうあっ!!」

垂れる唾液が潤滑液になる。ゴムに近い吸いつく質感を持ったグローブの指先が、スムーズに心のアヌスを抉った。指をくの字に深く曲げてくる。前立腺のこりりとした部分の

浅瀬が探し当てられた。外側からペニスを擦るのはまったく違う強烈な快感が紫電と化して頭を直撃する。隠された性感帯が爪先で引っかかれ、ぐりぐりと押し廻られる。身体の中を掻き乱される初めての挿入愛撫の気持ちよさは心をあっけなく惑乱させた。

「つつ……つつつつ！」

声にならない悲鳴が迸り、過呼吸気味に口をばくばくとさせる。泡混じりの涎がはしたなく飛び散った。がくがくと震えて閉じようとする両足が巻きついた触手によってまた元の位置に開かされる。ペニスがさらに充血を増し、臍の上で海老みたいに反り返りをきつくした。尿道からカウパー腺液が青々とした精臭と共に止めどなく溢れた。

生まれて初めて体験する強烈な尻責めが心を酔わせる。

「ふふ、おいしそうに蜜漬けになったおチンチン……んぶぶぶうう、はぶ、おんうう」

ひくつくアヌスから容赦なく前立腺をいじくり回され、さらに熱心に続くイマラチオがペニスを悦ばせる。強烈なバキューム技の刺激に未熟な神経棒が母親の口腔で跳ね、暴れる。猛る刺激に限界が迫ってくる。大きな噴火の気配を感じ取ってしまう。

「イ、イク、はるかなんかに、イカされるうう……つつっ！」

頭の中で母親の責めを拒絶しても、身体は欲求に逆らいきれない。心はぐぐつと自然に背を仰げ反らせた。腰が震える。普通の射精とは違う。目の前が白い電撃でバチバチと明滅し、太腿の内側で突っ張る筋肉が激しく痙攣する。はるかあの口淫テクニクと、裏側から前立腺を揉まれる信じられないやり方によって、無理矢理絶頂を盛り上げられた。

快楽の最後のワンピースがびたりと填まり、心は煮立った欲望を起爆させる。

「つつふうあああつ！ つつつつ……あああああああううううう——つつ!!」

全身に渦巻いていた淫炎が灼熱の怒濤と化して股間に集中し、遂に大爆発した。

どぎゅうう、どぎゅううるるるうううう——つ！

触手に押さえつけられた手足が強ばり、痙攣する背が弓なりに反る。

目の前が破裂するみたいに漂白された。未知のオルガスムスに四肢の末端から脳天まで焼き尽くされる。自慰なんかとは比べ物にならない凄まじく熱い解放の射精だった。

「んぶうつ、んんう……んぐぐうう……ぶうはああつ……すご……つつ」

荒馬のように暴れるペニスを押さえきれずに、はるかのかの口から爆発を続ける肉竿がぶるとまろび出た。びくゆりびくゆり、止めどない白濁の噴火が迸り、母親の顔を汚した。さらに絞られたのスペルマは心の腹から胸に、顎の下にまで飛び散る。

とんでもない量だった。白い絶頂液が噴水のように噴き上がる。身体の熱流を推進剤にして下腹の奥から快感が込み上げ、壊れた蛇口みたいにペニスの先端からぶびゅぶびゅと噴き出し続ける。尻孔に突っ込まれた指先が射精の絶頂を増幅していた。

括約筋の締まりに細長い異物が前立腺を圧迫する。それを踏み台にして尻側からも気持ちよさが押し上げられた。たちまち心は自らの精液に溺れ、白濁の海に沈む。不随意筋の収縮反応により意志とは関係なく勃起が波打ち、快楽が放出される。

「ふわあ、すごい量。不要なザーメンがどんどん出てくるよ、心……つつ！」



心の声も届いていないのかカナはもじもじしながら、傍目でもわかる勢いでしごきを強めていった。机や椅子が小刻みに軋みを発する。こ、このままだと……っつ。

「せ、せんせーっつ、気分が悪いのでカナと一緒に保健室にいつてきますうーっ！」
心は最後の力を振り絞ってカナを引っ張り立たせ、教室を脱出した。

「おう、どしたん、坊主たち？ また喧嘩でも……ぶげええっつ！」

日那田先生は男らしい性格の美人女医として人気だったが、カナは保健室に入るなりスチール製のゴミ箱を彼女の頭に投擲し、二秒で黙らせた。

「わっ!? カ、カナなにしてんだよおお、こんなのやりす……んわああ！」

頭にでかいコブをこさえて昏倒した日那田先生を尻目に、下から扶えるようなタックルをカナにかまされる。心は保健室の奥にあるパイプベッドに背中から墜落した。スプリングの利いたマットがぎしぎしと揺れる。周囲にある遮光カーテンが引かれ、周りを覆い隠した。薄闇の中、小さな少女のシルエットがゾンビみたいにふらふらと近づいてくる。

「カナ、ちよつと待って、落ち着けてば！ な、何その野獣の目!？」

「心……ごめん、私、もう……はあ、はあ」

ベッドに仰向けに寝転んだ心の上にぎつとカナの華奢な身体が四つん這いで覆い被さってきた。軽いデジャブ。昨夜のはるかの様子と重なり、心はごくりと唾を飲んだ。さらりと落ちるおかつば髪先端が頬に触れる。上気した綺麗な顔立ちの唇が迷うことなく接近

してきた。接近する。もう間近に。目の前に。吐息がかかるくらいすぐそこに。

「んんう……」

ちよんと心の唇に柔らかく甘い物体が軽く触れた。それはすぐにちゅっちゅつと触れ合いを繰り返して、それから強い力で押しつけられる。どくんどくんどくと心臓が激しく高鳴った。今までにない唇の触感に戸惑う違和感も一瞬だけ。カナの体温を直接感じられる口づけの熱さに意識の手綱を撓たふませる。頭の芯が気持ちよく痺れていった。

「っ……ふぐうう!! むうう……ふむう……んんうう——っっ!」

辿々しい初うぶなキスがすぐに大胆に唇を貪るエロティックな責めに変化し、カナの舌尖がぬるり。心の紅唇を割る。歯列をこじ開け、奥まで進入してきた。同時に敏感になって乳房がぐにゅりと制服の上から揉みしだかれる。カナの軽い身体が全体重をかけてくると、ディープリキスと積極的な愛撫が心を圧倒していった。

（むぐー、こお、これじゃあどっちが男だか女だかわかんないよー）

まあ、どっちも女の子なのだが。

カナの小さな唇と心の艶っぽい唇が唾液音を派手に鳴らしながらぐちゃぐちゃと熱く溶け合い、舌と舌が絡まり合う。否、一方的にカナに責められる。

ちゅば、ちゅばり、ちゅちゅ、ちゅぶうう。

二人分の唾液が混じり合って口の端から溢れ、頬を伝い落ちる。口内に注がれた唾液の泉がカナの舌肉で掻き回され、マグマの坩堝のような熱溜まりになった。テクニクも何

もない情欲に突き動かされるだけの初めてのディーブキスだったが、口内は禁断の味覚に目覚め、呼吸を震わす。舌を侵すむず痒さが、気持ちよさに転化されていく。心は自分で驚くほどキスに弱いみたいだった。頭がじーんと痺れ、口を貪られるに任せてしまう。

「心、心、これ、もう辛い……ど、どうにかして……お願い、はやく……っっ！」

ぶはあと唇を離し、カナは荒い息づかいで上半身を起こした。

心の腹を跨いだまま膝立ちになり、乱れた赤いスカートの中に両手を突っ込む。ゴムを伸ばしたストライプショーツが太腿の半分くらいまで引きずり下ろされる。拘束から解放された股間の物がスカートを裏側から盛り上げた。

（わわっ、な、なんだ、このでかさは!?!）

薄い布地の表層にぐいっと大きなテントが張り出される。その出っ張りにスカートの裾も持ち上げられ、カナの太腿の付け根の白さまでギリギリに見せた。

心はさーっと血の気が引く。テントの張り具合から察するスケールは、元の心のペニスより遥かに巨大になっていると推測させた。

「ちよっ、ちよおおおと待った、カナっ！ それどうするのそれどうするの？」

心は改めて彼女が雄の欲望に支配されていることを理解した。カナを突き動かす獣の本能。雌をねじ伏せて、灼熱の尖りで思い存分貫きたいと沸き立つ情動。

心ならずとも男なら誰でも持つ強烈な滾りなま。それが今、心自身に向けられている。スカートの下に隠された、ギンギンにやる気の伝わる硬さが心に狙いを定めていた。

あからさまな雄の欲望に直面し、心は怖くなった。

自分の物でありながら、得体の知れない物になりつつあるそれが心に恐怖を与える。

カナはもどかしげにクロスタイとブラウスのボタンも外し、前のジッパーを荒々しく下ろした。桜色のブラウスの合間から薄い水色のブラジャーが顔を覗かせる。少女の甘い体臭が鼻孔を擽った。香水とは違う馥郁たるカナの香り。女の子のくらくらする匂いと一緒に性の疼きが心にも伝わってきた。

制服の前を開き、下半身の雄根でスカートを持ち上げる彼女の切なく爛れる肉欲。ぐつぐつと沸き立つ淫靡な魔力に促され、感覚のシンクロ率が急上昇している。

「あ、あのね、カナ、少し落ち着こうよ、こんなのやっぱり……いにやーっっ！」

上半身を捻って逃げようとする可憐な尻尾を、ぐわしっ！と握り締められた。

へなへなと抗う力が抜けていってしまう。

「カ、カナあああ、しっ、尻尾は敏感なんだって……んんっ！」

昨日までなかった外器官は自由に動かせる分、その感覚も心に伝えた。カナの小さな手に握り締められると、うなじに息を吹きかけられるような、何とも形容し難い気色よさが生まれる。尻尾の毛が逆立ち、尾骶骨をじんじんと疼かせた。

「やっぱりそうなんだ……お春さんも尻尾は感じちゃうう、って言ってた」

尻尾がカナの両手に掴まれた。深紅の短毛が撫でられるようにこしこしと強めにしごかれる。心は「んんっ」と小さく呻き、お尻から腰の辺りをぶるぶると震わせる。尻尾がど

んどんと敏感さを増し、胴回りを太くさせた。失われた男性器の代わりみたいに雄的な反応を見せている。恥ずかしかったが女の子の手にそうされると、とても心地よかった。

尾骶骨の辺りのツボが刺激され、尿意も催される。男より女の尿道は短い。堪えるのが難しい。背筋がざわざわする。ぶるぶるっと我慢の喜悦が下半身から這い昇り、一瞬このまま漏らしてもいい気になってしまう。心はぎゅっと腹筋に力を込めた。

「はあ、はあ、はあ……んう」

心は逃げられぬようにしごきと尿意ですっかりと脱力させられた。

そうしておいてカナは、我慢を重ねた自分の勃起性器も強く摩擦し始めた。

「ん、ああ……心、おねがい……これ、ん、きもちい……ふうあああ」

TENT を張ったスカートの布地越しに勃起を掴み、彼女はこすこすこすこすと小さな手を上下させる。もう片方の腕は後ろ手にして反らした身体を支え、震える腰を前に突き出してきた。膝立ちの緩いブリッジを片腕で作りながら、心に差し出すように掴んだ盛り上がり不器用に慰める。隆起した先端が布地に先走りの染みをうつすらと広げ、カナが泣きそうな、それでいて気持ちよさそうに惚けさせた口元を微笑させる。

惜しげもなく晒される自慰の姿。打ち寄せてくる興奮の波頭を心も敏感に感じ取る。

「だ、だめだよ、カナ、そ、そんなに強くしたら……んん、もっとゆっくり」

「わっ、わかんないいい、わかんないよおお、ココロおお」

完全に発情のスイッチを入れて錯乱するカナは汗の玉を浮かべ、一直線に切りそろえた

おかつぱ髪を額に張りつかせる。心はゆっくりと上半身を起こした。心の方も淫熱の汗でブラウスが張りつき、肌色が透けている。極小のブラジャーに包まれた乳房が輪郭を浮かべ、ずきずきと全体を熱く膨張させていた。未知の快楽に戸惑っているのはカナだけではない。心も男と女の混じり合った複雑な桃色の疼痛に浮かされている。

(しょ、しょうがない、これはしょうがないから。カナをこれ以上ほついたら……)

心は自慰を続けるカナの掌に恐る恐る自分の掌を重ねた。

そのままカナの手ごとぎゅっと握り締める。

「つつ……ふああああんう!? あんうう、だめ、心、もつと……んつ、もつとおお！」

びくんびくんびくん。

カナの緩いブリッジがきつく反り返りを強め、頭を仰げ反らせる。剥きたてのゆで卵みたくにつるりとした顎先の裏側が露わになって快楽に震えた。

(す、すごい、カナ……いっぱい感じてる)

さすがに心は手慣れたしごきでカナの手を動かした。シンクロでの緩い刺激が心にも伝わる。目の前で女の子のあられもない姿が、それも少なからず想っていた隣の家の幼なじみが心の手で小さく喘ぐ。心も興奮を隠せない。彼女をメチャクチャにしてやりたいっ!

着崩れたブラウスを破り捨て、可愛らしく覗く水色のブラジャーも剥ぎ取って思う存分小さな胸を舐め回す。太腿の間に中途半端に下ろされているストライプショーツも全部脱がし、あそこをたっぷりと愛撫する。邪魔な物を奪い去り、全裸で組み伏せる。いつも怒

つたようなカナの顔をいやらしく発情させ、何度も犯す、蹂躪する、心の物にする。

「ん、んんくうう、こころお……いい、それ、スカートの裏、こすれて……あんうう」

妄想と現実が混じり合い、重ねた小さな手の熱さが心を昂らせる。押し倒されるより押し倒したい。カナを啜り泣かせて、イヤらしい体位でたっぷりと犯してやりたい。

しかし今の心は男ではない、身体は立派な女の子。

目の前にそそり立つ勃起が高い高い防波堤となって心を押し止めていた。女になって初めてわかるペニスの威圧感。心はまるでその怒りを収めるかのように、カナの手ごとしごきのリズムを新たに教えていった。手を休めれば心が逆にねじ伏せられる。その後はこの男根だんこんによって、心が思い描いていたような妄想が、立場を代えて繰り広げられてしまう。

だから心は弱く、緩く、強く、きつく、雄根を慰める効率のよい手淫の律動を薄いスカート越しに少女の無垢な手に覚え込ませていった。

「ん……いい、いいよ、その調子、カナ。そうやって先っぽの方を重点的にして……」

とろとろとろとカウパー液が漏れ出してスカートにさらなる染みを広げる。心は自分の股間でも女の子の性の器が愛蜜を滴らせるのを感じた。

相変わらず乱れる魔力の流れは収まっていない。赤毛に埋まるネコミミカチューシャによって頭皮が引っ張られているような感じがずっとしている。股間から頭の天辺まで。何か大きな奔流が繋がり、心の肉体を深奥まで荒らしながら造り替えている。完全な女の子の身体に近づこうと、秘裂がいやらしく愛蜜を噴き出させているようですらあった。

心は呼吸を子犬みたく小刻みにしながら、カナを慰め続けた。

やがて彼女は心に全てを預け、ペニスを握っていた掌をベッドに落とす。両手で身体を支え、赤いスカートに隠された大事な秘部を膝立ちのブリッジで差し出した。心は熱い脈動を薄い布地越しに改めて握り締め、その大きさと太さに驚いてしまう。自分が知っている物よりグレードの高いペニスの感触が雄々しく伝わってきた。

握りの強さにカナは益々背をびくびくと反らす。汗ばんだ桜色のブラウスの前が大胆に開かれ、水色のブラが飛び出す。小さな少女の胸が苦しそうに上下する。

「あんう……心、もつといじつて、何か奥からキそう、だから……あ……きやう!?」
後ろ手に身体を反らしていたカナだったが、力を込めすぎたのか掌がずるりと滑ってしまい、そのままベッドの端から上半身を落としてしまった。

「ごちりと後頭部がリノリウムの床に当たる硬い音が鈍く響いた。

「カ、カナ、大丈夫……っっ!? あ……」

「うう………いたいいたい……… あ……」

心とカナは同時に頬を真っ赤にさせた。上半身を背中から床に落としたカナだが、下半身はベッドに残っており、スカートがべろんと捲れている。まだ成長不足の細い両足が開き、白と青の可愛らしい縞々パンティが太腿の間でゴムを限界まで引き伸ばしていた。

ストライプの下着の向こうで逞しいペニスが姿を現し、屹立している。

「うわああ!? わわ、わああああああつ!」

心はびっくりして赤毛の頭を仰け反らせた。

それはピンク色に全体を上気させている。包皮に包まれて充血する亀頭から先走り液のとりみを溢れさせていた。心自身が知る自分の物より太く、長く成長している。青白く走る血管が強調され、全身からきつい雄臭を発している。魔力のせいだろうか。よくいえば猛々しく、悪くいえば下品に、姿形を変えていた。イヤらしい肉棒である。食べ頃の瓜のようなびきんびきんの成熟具合だった。

「わー、わー、な、なんだ、これ、わた……のより全然大きくなっちゃってるよお」

その根本ではカナの秘裂が興奮にぱっくりと割れ、桃色の幼い性器の造形を心に見せつけてくる。彼女の生殖器は男女が愛らしく同居していた。グロテスクな肉棒と違い、処女ならではの未熟な愛らしさを匂わしている。

「ん……こ、心、恥ずかしい……そんなに見たら……」

カナが握った両方の拳を口元に当て、本当に恥ずかしそうに頬を染めていた。さすがの彼女もエレクトする性器を見られては羞恥を覚える。ましてやそれは元々は心の物。幼なじみのきつい勃起が自分の股間で隆々と脈打ち、さらに処女秘裂を晒していれば……。

それでも両足は閉じずに、変化した心のペニスと儂はかなげな自分のヴァギナを隠そうとはしなかった。カナがぎゅつと両目を閉じ、瞬に涙の粒を浮かべている。

「ご、ごめん、心……なんかまた大きく……ん……あ……はあ、はあ……」

小さな呻きが漏れる。すると本体の芯が長さと同回りをさらに増した。体積の膨張に伴

い先端を包む薄皮がぴりり、ぴりりいとラッピングを破くように剥けていった。カ리를張り出させた無防備なピンク色の抜き身が、新しい肉のフォルムを見せつけるようにびくびくと痙攣を二、三度繰り返す。カナのつるつるとした下腹が苦しうに上下する。

「謝ることなんて……ないよ、カナ。こっちがいつも助けて貰ってばっかなのに……」

自然と身体が動いた。申し訳ない気持ちと共に、カナに対する純粹な愛しさがきゅんと胸を打ち、心は目の前のペニスにそっと両手で触れていた。濃密な雄の香りが鼻孔を刺激する。灼熱棒を両手で優しく包み込む。どくりどくり。胴回りの太い脈動が熱く掌を焼いてくる。その震えが触れたことにより益々大きくなった。

(うわ……す、すごい……びりびり、する……)

下腹にまで響く膨れ具合だった。

心は肉棒の鼓動を抑え込むようにぎゅっと両手を握り締める。充血していた亀頭がさらに真っ赤になり、今にも破裂しそうなくらいどぶどぶと先走りを溢れさせた。粘りのエキスがどろりと心の両手の甲を濡らす。心も熱く吐息を漏らした。カナの感じるペニスの喜びに感電する。女になった股間にびりびりと直撃する。漏れ出す愛蜜は量を増すばかりで止まる気配を見せない。切なくなる。心臓が早足を刻む。身体を蝕む魔力の高熱に理性が溶かされる。

カナが潤んだ瞳で熱っぽく心を見つめてくる。何を期待しているか丸わかりだった。心だっ立場が逆ならカナにそうして欲しいと思ってしまう。

心はゆつくりと握り締めた勃起ペニスに顔を近づけた。雄の匂いと熱が間近に迫る。
(え……？ い、いいの？ こんな自分の物にしちゃっていいのか……？)

自問自答しても止まらない。心はすっかり発情した赤ら顔で、唾液に濡れた紅唇を恐る恐る開く。震える舌先をその合間からちろり。ちよつとだけ突き出した。

心は雄のエキスが漏れ出す龟头に口づけする。

「つっ……ふうあああつ！ 心っ、あふう、心心心心……あひいいいいつつ!!」

舌先でとろみを発する尿道を探るようにしてにちやにちやと舐める。

(うわあ、しょっ、しょっばいいい……)

カウパー腺液の苦みと熱い粘りが舌の先っぽから伝わり、口内にむわりと広がる。握り締めた淫杭がびくんびくんと悦びにのたうち回る。もつともつとと全身でジェスチャーして愛撫を求める。頭が茫^{ぼう}としてきた心は自然と顔を前に突き出し、反り返りをさらにきつくしていくペニスの先端に口づけした。

唇を窄めてむちゅむちゅりと鈴口を吸い上げる。カナとシンクロしている。元々は自分のペニス。だから何をされれば一番気持ちいいかちゃんとわかっってしまう。しょっばい熱さが紅唇に伝わり、尿道が壊れたように先走り液を派手に噴出させた。

何とも形容し難い精臭とぬるぬるする苦みを一緒に吸引する。

ちゅむう、ちゅぶううううううう、じゅうちゅううううううるうう。

「あぐううーっ！ こ、こころ、すごい、ちんちん、んんっ、すごいよおお——っ！」



「はひいひい!! イッ、イッて……たくさん、でてくう……ううううあああっ!!」
悲鳴のようなカナの絶頂声が甲高く室内に轟いた。

「ん……んんんんう!? つんぶぶぶぶぐむううつつつ——つぶはあ!」

心は跳ね回ろうとするペニスを両手で押さえ込む。怒濤が噴き上がる。一点に集中する爆発力は心の小さな口だけでは受けきれない。沸騰した白濁がすぐに口腔から溢れて息が続かなくなり、心は勃起から顔を逸らした。止まらない欲望の粘つきが痛いくらいの勢いで大量に顔にぶっかけられ、白濁の湯気を立てる。

「んぶぶぶぶぶうううう——つつ!!」

びゅくりびゅくりと肉棒の内部を通して吐き出されてくる精子の勢いが掌に繰り返し伝わった。昨夜の心みたい、カナのペニスも射精が中々収まらない。心自身もカナの感じている絶頂感の何分の一かをシンクろして追体験し、益々ぎゅつと強くペニスを握った。緩やかなしごきを両手一杯に加えて、最後の一滴まで気持ちよさを出し尽くさせる。

「はあ、はあ……んぷう、カナ、すごいよ……こんなに一杯、ん、出して……」

口を開くとねっとりとしたザーメンが差し出した掌の上でたくさん溢れた。

舌の腹から口蓋まで粘りのえぐみが広がっている。さすがに精液を嘔下するのはどうだろうと思ひ、吐き戻してしまつた心である。だが男の時は汚いと思つてしまうスペルマもカナが頑張つて出した物だとわかれば、好ましい粘りに感じられるから不思議だつた。

むしろドキドキとしていた。

「さ、さわるな……これ以上は、ぜったいにゆ、ゆるさ……ひゃああ！」
秘裂の間際までブルマーが捲り上げられ、完全に尻が露出させられる。

心は顔を羞恥に火照らせ、さらに括約筋を締めた。随意筋の収縮に引つ張られて尻たぶ同士が磁石みたいにくつつきを強める。女の子になっても脂肪の下の筋肉は同じ年頃の娘より遥かに密度が濃い。だがマシユマロのような柔肉できつく締まった美尻の谷間に、青箒は容赦なく両手の五指を突っ込んでくる。割れ目がぐぐつと開かれた。

「可愛らしいケツ孔です。一生懸命に皺を寄せてるです」
「くっ……っ、くく」

恥辱に涙が滲んだ。

愛蜜まみれにされただけでなく、その状態で肛門が晒し者になる。もちろんそれだけでは終わらない。青箒が自分の中指をちゅぷりと舐める。たっぷりと唾液をまぶす。

「つつあうううううっ！ や、やめろ、へっ、へんた……いいいいっつ！」

ぬぶ、ぬぶぶぶぶぶぶぶうう。

色素の薄い肌色で彩色されたアヌスは、排泄の為の器官であることを忘れさせるしと淑やかさで息づいている。慎ましやかな排便孔を唾液に濡れた青箒の指先が容赦なく抉った。

ぐりぐりんぐりん、ぐりぐりぐり……。

肛門肉が異物の挿入に驚き、根本まで一気に入ってきた指をぎゅつと締めつける。はるかに挿入された時と同じか、それ以上の衝撃が尻孔で炸裂し、融解する心の理性をさらに

削り取った。青箒は括約筋の急速収縮に逆らう巧みな搔き回し方でアヌス皺を容赦なく蹴散らす。心はぎゅっと目を瞑り、屈辱を堪え忍んだ。

「あ……あつう、あついのがあああ……」

鋭敏な受容器官が侵入した指先の形が変わっていくのを知覚した。青箒の中指が細長い触手に変化し、その先端から直腸内にどくどくと熱い迸りを撒き散らし始めたのだ。腸壁が焼けるかと思われる熱気と量が心を錯乱させる。

垂れ下がる三つ編みの赤毛を激しく揺らし、いやいやと首を振った。ぎゅっと瞑った眸に涙の粒が浮かんでしまい、今にも泣き出しそうな情動に駆られてしまう。

「うふふ、敏感な女の身体を、大きなうんこの塊を出す衝撃でイカせてやるです」
恐ろしい宣告に心は唇を噛みしめた。

冗談の類ではない証に、肛門に入り込んだ触手は濁液の量を増し、直腸を焼きながらS状結腸にまで流れ込んできた。ぐるぐるうと腹が不吉な音を鳴らし始める。

「うふふ、そういえば貴方の母親、赤箒も昔、こうやって尻孔をいじめてやったです」
「んく、な、に、言……」

括約筋を締めても触手の浣腸液注入は止まらず、心の大腸まで侵し始めた。腹がゆっくと張っていく違和感に、心は頬を上気させ、息を小刻みに荒げる。

「昔々、九人の魔法少女がいたです。彼女たちは『九本箒』^{ナインテール}と呼ばれ、黒妖精たちと戦ってました。しかし、ある日を境に激しく仲間割れ。それが十五年前に起こった『魔法少

のるのるのるんと入り込み、乙女の可憐な花びらを一方的に踏み散らしていった。

「おおお……はあ、はあああ……つああああんう！」

全身への責めに愛蜜をたっぷり分泌させていた秘裂が、つるつるのレオタード素材に似た生地の下でぐばりと左右に開かされる。舌肉の破廉恥な動きに大淫唇が派手に引き伸ばされ、小淫唇のヒダの合間にぬるりとした刺激が溶け込んだ。

織毛のような舌肉の激しいもつれ合いにブルマーの股間はこんもりと盛り上がる。

収縮率の高い生地が今にも破れてはち切れそうになる。

カナとの初体験を終え、異物を受け入れられるだけの柔らかみを開拓されたばかりの性交の肉孔に、細長くしなやかな尖りの束が、ちゅぽり。まとめて侵入してくる。びりびりびりと下腹から脊髄を通って性悦のインパルスが脳を翻弄した。

(そんな、おくまで、ほ、ほじられたらああ……)

強いぬめりで摩擦を感じさせずに挿入されていく肉毛が、最も敏感な膣道内へと深く潜り、ヒダ肉をこそぎ、内壁を引き伸ばす。お湯に浸していた指を何本もまとめて挿入されたような熱さが胎内で暴れ回った。愛蜜の粘り音が恥ずかしいくらいに大きく響き渡り、心の性的興奮を吹聴する。

「うふふ、よい声が出るようになってきました。この子たちの愛撫は絶品なのです。ついでにおっぱいから母乳を出させ、ちゅうちゅ吸うのも大好きです」

青箒がいたずらっ子のように笑った。

「ミルクが出ない娘でも強制的に出させるです。なぜならこの子たちはデンキウオのように全身から特殊な刺激パルスを発し、獲物の生理機能を操れるからです。うんこと一緒にミルクも死ぬほど惨めに嘔き出させてやるです。ほら、もうたまらないです」

「つくうううあああああ——っ！」

乳房を締めつける触手の力みが強くなり、ベルトブラの中で舌肉にしごかれる勃起乳首がびりびりと感度を上げた。熱い何かが乳房の硬くされた先っぽに集中していく。それは射精間際のペニスの感じに酷似している。心は盛り上がる喜びを抑え込もうとしたが、胸の先っぽをどうやって我慢するのか見当もつかず、淫電気に痺れるだけだった。

「身体をいやらしく壊すです、この子たちのパルスでしっかりとおっぱいを目覚めさせるです。糞と一緒にミルクも出させて混ぜ混ぜしてやるですっ！」

興奮の様相で青筍が口の端を歪める。その昂揚に連動して、舌肉の細い尖りが尿道にまで入り込んできた。排尿機能を逆に遡られ、体感したことのない擦れた痛みが迸る。

「ついいいたあああーっ！ やああ、やだやだ、そこは、あぐううーっ!!」

身悶えても触手の拘束は髪の毛一本分も揺るがなかった。

秘所の二つの隧道すいどうが同時に餌食にされ、細かな抽送で心を打ちのめす。

十分な濁液に濡れ、柔らかかみのみで構成された肉舌は繊細な媚肉粘膜を傷つけるような真似はせず、心の内部を探るようにしてその淫靡な感触を慣らしていった。

（お、おしっこの孔に、お、おくまできてる……きてるよお……）

尿道への挿入は繰り返し扱られる度に段々と痛みを減らす。細長い粘りの抽送がいつしか熱い小水を常時垂れ流しているような排尿感に転換されていった。

膣に入った肉毛の方は膣の裏側辺りを執拗に擦り舐め、遂に極小のGスポット地帯を探り当ててしまう。そこをこしょこしょと刺激されると、股間全体が燃え立つように電撃を発した。膣の周りのつるつるとした表皮の下で腹筋が突っ張るように痙攣を起こす。

「っんひいいい！ そ、そこおお、あつ！ そ、そんなに、おつ！ おはあ!!」

膣責めに連動するように尿道内の舌肉も蠢く。薄皮一枚隔てた外側から膣道のGスポットをくにくくにゆくにゆくと刺激した。

「つつ……つつ!? お、おおおお……つつつつ」

前後からGスポットを磨り潰される人外の責めに心は唇の端に白く泡を煮立たせる。

快楽の量が増えられ、秘孔からどぶるとどぶると大量の愛蜜が溢れ出ていく。まるで掘削されたばかりの石油のように。

「もう気持ちよくてどこもかしこも壊れかけてるです。どちらが変態ですか？」

青帯の陶酔した声音に反応してブルマーの中でも異形の蠢きが強まる。尿道と秘孔をぐちゅぐちゅと弄びながら、クリトリスにも細長い鞭毛が絡んできた。淫核はまさに女性器のペニスと呼べるもので、心はそこを直接にいじめられる衝撃に悶絶し、大きく開いた口をわななかせる。射精時のオルガスムスに匹敵する津波が下半身から広がる。少女化した身体に慣れきっていない心の脳には、射精に達したまま執拗にペニスをこねくり回されて

いるような過負荷がかかり、目の前に稲光が何度も落ちた。

「ひいああっつつつ！ あんう、んんんっ、あつ、ああああおお!!」

十分に充血している秘裂の突起は包皮を強制的に捲られ、剥き出しの神経の塊として執拗にしごかれ続ける。官能に感電する肉体はしとどに愛液を溢れさせ、決壊したダムのようにブルマーのクロッチ部分を汚した。生地の間隙からだらだらと粘りの滝が流れ、吊り下げられた心の身体全体を濡れ光らせていく。

愛蜜が触手の発する濁液と混じり、膨らみを増していく腹と、それを締め上げる拘束になりつつあるショートコルセットの革地の表層を伝い落ちた。さらに双乳を締め上げる触手の合間を通り滑って、ベビーピンクに染まった鎖骨から首筋を経由して、性悦に紅潮する心の顔もびしょ濡れにしていた。

(あうう……も、もうイキそう……イキそうなのに……お、おなががああ……)

触手の執拗な全身愛撫に苛まれる少女の肢体はアクメの気配を感じ取る。だがその度に腹の中を満たしていく大腸の圧迫が絶頂に至るのを妨げていた。

心はまだまだ女の子の身体を習熟していない。一方的に乳房や秘裂を責められれば、もう達するしかないのだが、重くなる腹腔がそれを容易く許さなかった。そして恐るべきことに、膨れ上がる絶頂への兆しは浣腸液に蝕まれる痛みすら呑み込んで、より大きなオルガスムスへと成長しようとしていた。

全身を絶え間なく溶かされる喜悦に頭を失神間際まで朦朧とさせると、下腹の痛みが意

識を揺り戻させる。腸全体を満たして便意を肥大させる痛みに柳眉を寄せると、新たな愉悦が股間から胸から至る所から滂沱と流れ込み、心に嬌声を上げさせた。

「……んんんんううう、あふううつ、だ、だめだ、これ、こんなののおおおつ!!」

焦点を失った両眼で心はびくびくと悶え続ける。

特に胸は灼熱の肉塊になり、今にも先っぽが爆発しそうになっていた。強弱のついた執拗なしごきに、興奮した乳首がもう音を上げようとしている。

「そろそろお腹も限界みたいです。たっぷり出すぶりぶりタイムは間近です」

「んおおおつ!」

肛門から細い浣腸触手が引き抜かれ、異物を排出した括約筋が鉄のように締まった。

だらしなく開いた口の端から涎が飛び散る。

肉糸の蜘蛛の巣の方から心の胴回りくらいある太い触手が新たに出現した。それは先端部のぬめぬめした外殻を分割展開させ、向日葵ひまわりの花びらみたいに大きく開いた。

内側には吸盤状の肉の短毛がみっしりと生えておぞましく蠢き、女性の性器みたいな肉孔が中心部に穿たれ、息づいている。

「この子たちは糞が大好きなので根こそぎ出すです。特に魔法少女の糞は魔力で味付けされた極上の一品です。心配しなくても残らず吸い出してくれるです」

「ああ……だ、ださない、こんなの、で、だしたらああ」

心はか細い声音で反駁する。

に風穴を開けられたアヌスはもう閉じることを許されない。

むりい、むりりい。排泄塊の本体に急襲され、心の肛門はあっけなく陥落した。

「つつつつ——ひいあああああああああああ——つつつ！！！」

排便の淫撃に心は両眼と口を限界まで開き、震える舌を突き出して悶絶する。人としての尊厳が放棄されるのと引き替えに排泄の気持ちよさが濃縮され、一点に集中した。野太い塊が不浄の蛇と化して肛門を長々と内側から犯していき、桜色の直腸肉を禁断の快楽で外に華開かせた。大腸の肉壁にこびりついていた古層も溶かし剥がされ、まとめて下ってくる。熱くどろどろした塊が肛門を潜り抜け、心の矜持と共に吐き出されていった。

(イツ、イツちゃううう、うんちしながらイツちゃううう……)

焼けた栗が連続して爆ぜるような衝撃に背筋は痺れ、その解放快楽の苛烈な燃焼が脊髄を経由して、つんと張り出した乳房の先端にも歓喜をスパークさせた。

「つあああああああつ！ おつつ……おとおおとおおとおおとおおとおおとおお！！」

びぶつしゆう、ぶぶう、びぶゆうるるるるつつつ——！

ベルトブラの裏地に跳ね返るように白濁が爆発する。その隙間の左右から純白のミルクが漏れ出し、飛散した。舌肉で徹底的にしごかれた乳首が、遂に噴乳するまでに改造されてしまったのだ。触手が巻きつく豊かな半球が波打ち、煮詰まった雌臭が匂い立つ。

「おおおつつ、おっぱいいいいいいもおおおおおおおつつ——つつつ！！」

射精間際のペニスみたいな感じでじんじんと疼いていた乳首は、ミルクを遊らせると本



「えへー、魔力を供給するにはおちんちんが必要不可欠だからね」

荒く呼吸を吐く心に向けて、はるか猫みたいに目を細める。何を意図しているかは明白だった。ペニスを媒介にした魔力供給。心は混濁する意識でぐくりとそれを見る。

大人らしく扇情的に肉びらをはみ出させる淫唇の合間から、赤褐色の猛りが臍まで反り返っていた。本来男性器を受け入れるはずの肉孔に双頭のディルドーを差し込んだみたいな格好になっている。本物のようであり、偽物のようであり、しかし質感は生々しく、赤褐色の胴体にごつごつと浮かぶ血管が蛇のように根本から亀頭まで走っていた。

「さあ、心。抗う意志がまだ挫けてないのなら、あたしの極上魔力をたっぷりと与えてあげる。そして青箒の姑息な呪いに打ち勝つのだっっ！」

タンクトップに包まれた乳房をたぶるんと揺らし、はるかが拳をぐつと握り締める。反り返りを露わにしたまま、心の目の前に迫った。

「……心」

「だ、だいじょうぶだから、カナ……。こんなの……。な、なんでもない、から……」

心配げに瞳を曇らせるおかつぱ少女の薄い膨らみから身を起こし、お尻の尻尾をばたばたと振って待ち受ける母親の股間に赤らんだ顔を寄せた。カナとナオミに見られてしまっている。恥ずかしい。しかし気にしている場合じゃなかった。子宮の疼きは益々酷くなり、心の肉体を汚染している。快感に意識が乱れる。失神しそう。だが今意識をなくせばこの少女の身体を青箒の思い通りに操られてしまうだろう。時間がない。心の中で枯渴した魔

力。それを泉のように持ち合わせているのがはるかなのだ。

彼女のペニスからは抗い難い芳醇な蜜の匂いが湧き立っている。

心はぶるぶると震える舌を突き出した。

(こ、こんなの舐めちゃったら……あああ、でも、すごく、きつい臭いが……)

男としての意識が躊躇いを発する。女としての欲望が雄根を求めめる。

亀頭の先っぽを舌先でつんと突いた。じーんと身体に熱さがぶり返す。心は畳に膝立ちになり、はるかの物を舐める。男の理性は苦いペニス味にとろけていった。

「あはぁあん！ やっぱりママのおちんちんがいいのね、こころ。舐めて舐めて、カリから根本までたっぷり舐めて。ああ、すごい……娘のフェラきくうううううん」

「んぶう、んん、むうう……だ、だから娘じゃないってば……んん」

ぺちやりぺちやぺちや、ぺちやりり。

舌を突き出し、たっぷりと唾液を含ませた肉腹で亀頭を舐める。赤褐色のカリに舌先を絡ませ、大きく開いた口に猛りを含んだ。もうすっかりと慣れ親しみ、男性器をフェラできる自分がいる。ちゅくちゅくと舌先で尿道をこそぎ、紅唇の輪をねつとりと締め上げながら吸引する。先っぽをくわえられたペニスがびくんと硬い胴体を波打させた。舐めているだけで全身がびりびりと気持ちよくなる。もう口の感度も上がり、性器のような快楽神経を伴った孔の一つに変化していた。口蓋に当たる亀頭が脳をスポンジにする。

「んぐうう……んう、ふぶぶうう、えお……おお……おおおんんう」

「はあああん、す、すごいよ、こころ、そんな、おいしそうに舐められたらあつ！」

はるかのかのペニスからびりびりと電気みたいに魔力が流れ込んでくる。さすがに元魔法少女だけある。くわえているだけで純度の高いエナジーが疲弊した肉体に染みてくる。

心は赤毛の頭を前後させながら、積極的にはるかのかのペニスを呑み込んだ。ずちゅずちゅると唾液音をはしたなく鳴らしながら、先端から中程まで熱い塊の旨みが滲む部分を舐め尽くす。心の背中に垂れる三つ編みが激しく踊った。

流れ込む魔力と己の昂りに身悶えながら、ねちつこく奉仕を続けた。

すると、どくんどくんどくん。膨れた腹が大きく波打ち始めた。

「ああぐううう……、も、もうだめ、お腹イキ、イキそおおおおおつ！」

口淫で魔力を多少なりとも得たせいだろうか。その高濃度な流れに反応し、快樂の波動が少女の肢体を苛んだ。青箒の野太い男根で子宮口をひしゃがれ、お手玉された時のように、腹の中で喜悦のマグマが荒れ狂う。心は再びソファベッドに倒れ込んだ。

（犯されてるう、また……あ、あいつに子宮の中まで……）

ずくんずくんずくんつ。

心は必死に歯を喰い縛る。気を抜けば一気に意識が持っていかれそう。子宮に巣くう熱い塊。それは大きな卵の形の輪郭をずくずくと伝えてきた。肥大した子袋の中で本物の卵が脈動している。男にはない器官の感覚で心の雄の本能を打ちのめす。己を再生させる為に、心の大事な部分を根こそぎ踏みじろうと足掻いている。

「大丈夫だよ、心。そのままたっぷりイキんで卵を出しきっちゃいなさい」

はるかかの尾骶骨から垂れ下がる猫尻尾が触手に早変わりする。枝分かれした肉蛇たちがうねうねと首やお腹に巻きつき、心を四つん這いにさせた。

両手はJrの触手に縛られているので、ソファベッドに上半身を預け、お尻を突き出すような姿勢になる。子宮の疼きに張りつめた白い桃尻がびくびくと跳ねる。乾いた色々な体液でばさつくフレアスカートが捲り上げられた。

ブルマーのお尻の曲面をはるかの指がなぞる。汗ばんではつきりとむちむちの造形を浮かべせる尻肉の割れ目に沿って、上から下までつつつと指先が滑り落ちた。丸みに合わせて恥丘の方まで。するとその指先痕が滲み、銀色のジッパーに生まれ変わる。

「お尻の方からたっぷり突いて、卵を出すの手伝ってあげる、うふふ……」
じじじじ……

はるかかの魔法によって作られたジッパーが尻側の方から下ろされていく。むわり。ブルマーの内側に籠もっていた熱気と臭いが漏れ出す。レオタードみたいになつるつるな生地裏側で蒸された心の甘い汗の香りと、乾いた精液の混合刺激臭である。

「んはああああ、すっごいきつい臭い。それにかわいい肛門がひくひくして……」

四つん這いになった母親にくんくんとお尻の匂いを嗅がれる。心の剥き出した尻の谷間に犬の習性みたいに鼻面を沈めて鼻を鳴らす。恥ずかしい母親の様子に心も羞恥に頭を沸騰させる。幼なじみの二人の前なのに、親子で卑猥な格好を晒してしまっている。

「んんんんんう、あんう！ は、はるかあ、はあんんう」
ぺちやぺちやぺちや……。

はるかの顔が心の臀部の割れ目に埋まる。今夜だけで何度も責められ、抉り尽くされた排泄孔に母親の舌先が荒々しく潜り込んできた。ぬろんぬろんと激しい抉りに心の肛門はあっけなく皺を伸ばす。責めるに慣れた舌先が不浄の孔を掻き回した。

ぶちゃんぶちやぶちやぶちやり。

本物の犬みたいにさもしい母親の舐め回し方だった。

「ぶはああ。随分柔らかくなっちゃって。あたしがたっぷり愛で直してあげるから」

「ん……あああああうう——っ!!」

はるかのペニスが泥のようになった肛門にぐちゃりと当てられ、ずぶずぶと深みに沈んでいった。偽物なのか本物なのかよくわからないペニスであるが、張り出したカリも反り返りの具合も、直腸壁を引き伸ばす胴体の熱さも心を喘がせるに充分な感触だった。

G スポットみたいな性感帯を開花させられた直腸の突き当たり先端が達するまで、心は何度も絶頂を極めそうになる。狭い腹腔でペニスと押し合いへし合いして支配権を争う子宮のしこりがなければ、心はあっさりとは肛門絶頂させられていただろう。

それくらい気色のよい母親の魔法デイルドーだった。

「ふんううう、あ、はああんんうう、はるかあ、はるかあああ」

「っすごい、締まるうう、心のおしりの孔、柔らかいけど巾着みたいにきつく……っ！」

根本まで入った母親自身をきゅうううううう、とお尻の孔で包み込む。いやらしい脈動をするフォルムに直腸壁のヒダが絡みつき、複雑な蠕動ぜんどうではるかを愛で黷った。

肛門を開発され、性器のように扱うコツを悟ってしまった心である。括約筋を微細に緩め、きゅつと引き締め、それを無意識に繰り返す。亀頭の丸みからカリの張り出し、胴体の反りのライン、太さと硬さに合わせてぐにゅんぐにゅにゅううと肛門を奉仕させた。

(んん、こんなにやらしく……お尻のあな、うごかせるようになって……)

ばあばあばあばあ。はるかかの腰が心の尻に繰り返し打ちつけられる。淫杭が肛門粘膜と激しく擦れ合い、その摩擦により濃厚な魔力が発生する。激しい抽送に奥から浅瀬までカリで均等に引き伸ばされ、肛門が開きっぱなしになっていく。長々と排便しているような感覚に目の前がバチバチと白く爆ぜ、はるかかのトルクによって生み出された魔力が直腸の感度を上げながら身体の内染み込んできた。

肛門全体から心地よいオーラの波が広がり、子宮を震わせる。魔力的、物理的に乙女の中心地が圧迫され、急激に腹腔がもつれる。胴体部の反り返りが摩擦熱で子宮を下側に押し、卵を膣道にどんどんと下らせた。

「いああああああつ！ た、卵、くるう、おなか、ひつ、引きつるうよおおおつ！」

「くつ、も、もうすぐだよ、がんばって、こころ。ん、もつと深くまでえ」

「つつ——ひいにゃあああああああああああああああつつつ!!」

心は繋がったまま母親に抱え上げられる。ずぶんと自重にペニスがりめり込む。

バラバラにされそうな喜びが背筋から頭蓋まで雷みたいに直撃した。

お尻の孔でたっぷりとイケるだけの快感を得ているのに、卵に邪魔される。

「あぐぐううう……お、おなかあ、だめ、だめえ、も、もうでてき……てええっ!!」

はるかかの手が伸びて、心の両方の足首に巻きついた。てらてらと艶光るオーバーニソに包まれた美脚が左右に大きく引つ張られる。心は大開脚を晒した。ぽっこりと膨れた腹から深くまで肉槍に貫かれた肛門まで隠しようもなくなる。ブルマーの赤い生地がびっちり恥丘に張りつき、秘裂の形を浮かばせる。

心はソファベッドに腰掛けたはるかかか膝に乗せられ、背面座位の格好にされた。

後ろから腹ごと抱きしめられ、ぎゅっぎゅっつと強烈な圧迫が加えられる。堪らず心は肛門を抉るシャフトを思いっきり根本から締め上げた。

「もうすぐ、で、でる、お、おおきいのがそこまでええええつ、にいぐぐつっ!」

「あっんう! 魔力が心に持って……い、いかれるうう……あああああつ!!」

心は繋がったベニスを通し、彼女が持つエナジーを心地よい熱気と一緒に根こそぎ奪い取っていく。根付こうとする卵を押し出す為に身体が魔力を欲していた。リミッターが外れ、心は母親を散々に締め上げる。快感神経を痺れさせる濃密な魔力を強奪する。

「は、早く産まないと、あたしが持たなく……んんっ、カナ坊! ナオミもっ!」

はるかかの切羽詰まった叫びに幼なじみの二人が事態を察する。

カナとナオミがソファベッドにひらりと飛び乗り、左右から心に詰め寄ってきた。

「はあ、はあ、こ、心……わ、私の魔力もあげる。だから……」

カナが真っ赤な顔で自分のパジャマに手を掛ける。

心とはるかの交わりを端から見ていて当てられたのだろう。薄ピンクのズボンを躊躇いなく下着ごとぐいと膝まで下ろした。まだまだ成長途中のお尻がぷりんと現れる。産毛のような恥毛の生える股間には心の陰茎が小生意気に屹立していた。包皮を少し被っている仮性包茎の白いペニスはどう勃起角度をきつくしている。

彼女とは性器の感覚がシンクロしているので、興奮の度合いがすぐにわかる。先走りに尿道を濡らし、外気に触れたことにより屹立がさらに強くなっていく。ぺりぺりと包皮が自然と剥け、カナの興奮が心のペニスをよりイヤらしい形に進化させた。

「待ちくたびれましたわ。さあ、わたしくの魔力もたっぷり吸い上げなさいな、心っ」

ナオミがストラックスのベルトを手早く外す。小さなビキニブリーフの下からぶるんと元氣よく峙そばたって現れたのは勃起したペニスであった。ナオミは完全な女性の身体を得ながらも、股間にはあの逞しい肉茎を残していた。性転換魔法ですら使い込まれた歴戦の雄根までは変えきれなかったのだ。心を教室で愛でた黒光りが力強く屹立する。

「んぐうつ、ちよっ、ちようだい、カナ、ナオミ！ おちんちん、お、おちんちん!!」

耐えきれない肉体の欲求に惑わされ、心は餌をねだるひな鳥みたいに舌を出して口を大きく開いた。右から左から、カナの白っぼさの残る肉槍と、ナオミの使い込まれた黒檀の反り返りが一緒になって口内に捻り込まれる。顎が外れそうなくらい淫肉棒を頬張った。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/本体690円(税込)

全国書店で
好評
発売中



織田(希莉香)信長、最大の危機!?
戦国武將の名を持つ美少女達が淫らに大バトル!!

信玄、出陣!!
小説：斐野嘉和 / 挿絵：SAIPACO

参

全国書店で
好評
発売中



吸血姫と狩獵者二人の影が闇を斬る
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画
が特選のノベライズ!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
小説：夜土郎 / 原作挿絵：渡瀬行人

△

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- 仙皇学塾戦姫ノブナガツ! ①～②
- 悪者姫なアダム ①～②
- 格闘! 帝部少女探偵団 赤い眼帯を巻いて!

- 借金の狼騎士 ①～②
- プリンセスリバーシ! 交響する美姫と魔姫

- 無敵の狼騎士がDMCに目覚めたようです
- ビルグリムメイデン 深紅の狼騎士女

ビルグリムメイデンII

白装の騎士

小説：狩野景 / 挿絵：ほちん



2010 3月 下旬
発売予定!!

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

